

学位論文審査の結果の要旨

| | |
|---------------|--|
| 1. 申請者氏名 | 佐々木 宰 |
| 2. 審査委員 | 主 査：（兵庫教育大学教授）浅海 真弓 副主査：（兵庫教育大学教授）大西 久 委 員：（岐阜大学教授）山本 政幸 委 員：（岡山大学教授）清田 哲男 委 員：（兵庫教育大学教授）前芝 武史 |
| 3. 論文題目 | 多民族・多文化国家シンガポールの美術教育カリキュラムに関する研究 —民族文化と国民文化を通じたアイデンティティ形成と創造性育成— |
| 4. 審査結果の要旨 | 論文提出による学位申請者 佐々木 宰 氏から申請があった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時:令和6年2月10日(土)16時00分～16時30分(オンライン開催) |
| 1. 学位論文の構成と概要 | (1)学位論文の構成 序章 問題の所在と課題 第1節 研究の主題と目的 第2節 先行研究と研究の方法・全体構成 第3節 予備的情報と用語の定義 第I章 美術教育における文化的アイデンティティと創造性 第1節 美術教育における文化的アイデンティティの形成 第2節 美術教育と創造性 第3節 アジアの美術教育と創造性と文化的アイデンティティ 第4節 第I章のまとめ 第II章 シンガポールの社会、文化、教育 第1節 多民族・多文化国家シンガポールの輪郭と教育 第2節 シンガポールの学校教育制度とその特徴 第3節 第II章のまとめ 第III章 シンガポールの美術教育の現状その背景 第1節 シンガポールの美術教育 第2節 美術シラバスの変遷 第3節 第III章のまとめ 第IV章 シンガポールにおける美術文化の展開 第1節 シンガポール美術の黎明期 第2節 シンガポール美術のアイデンティティ 第3節 第IV章のまとめ |

| | |
|--------|--------------------------|
| 第V章 | 民族文化の教材化と国民文化の創出 |
| 第1節 | カリキュラムにおける民族文化と国民文化 |
| 第2節 | 教科書に見られる民族文化 |
| 第3節 | 多民族・多文化社会における美術教科書の意義 |
| 第4節 | 第V章のまとめ |
| 第VI章 | 知識基盤社会の創造性と新たな国民教育 |
| 第1節 | 「考える学校, 学ぶ国家」の教育改革 |
| 第2節 | 21世紀の教育改革の展開 |
| 第3節 | 創造性解釈と教育実践 |
| 第4節 | 第VI章のまとめ |
| 第VII章 | 芸術文化を通じた創造性とネイション・ビルディング |
| 第1節 | 芸術文化振興政策と新しい美術教育の実践 |
| 第2節 | 「我らのSG芸術計画」と社会的創造性 |
| 第3節 | 美術教育, 芸術文化振興政策と社会的創造性 |
| 第4節 | 本章のまとめ |
| 第VIII章 | 結論 |
| 第1節 | 前章までのまとめ |
| 第2節 | 結論 |

(2) 論文の概要

本研究は、東南アジアの中でも特徴的な多民族・多文化社会をもつシンガポールの美術教育を取り上げ、そのカリキュラムの史的展開をたどりながら、民族文化と国民文化を通じたアイデンティティ形成と創造性育成という機能を考察するものである。

シンガポールの美術教育は、民族の造形文化をカリキュラムに取り入れることで、民族的なアイデンティティ形成に関与してきた。同時に、民族を統合する国民的な文化や国民的なアイデンティティの形成も図られてきたが、その実現は容易ではなく、他方、創造性育成は美術教育の一貫したテーマであったが、その内実は、社会や産業の発展過程によって様々に解釈されてきた。特に、1990年代後半からは、芸術文化産業立国を目指した国家的プロジェクトが推進され、知識基盤社会における資質として注目されている。

芸術文化を通じた創造都市を目指す今日のシンガポールにおいては、国民的なアイデンティティと創造性は、かつてないほどに近いものになっており、両者の育成を目指す美術教育の役割は一層高まっている。

本研究ではこのようなシンガポールの美術教育の特徴的な機能を明らかにするため、以下の研究目的が設定されている。

- ①民族と国民という二つの文化的アイデンティティ形成のための教育内容が、どのように教材化されカリキュラム化されたのか、その背景と方法論を明らかにする。
- ②美術教育を通して育成するべき創造性がどのように解釈され、カリキュラムの改訂に伴って変化してきたのかを明らかにする。
- ③1990年代後半以降の文化・教育政策の大きな転換の中で、民族文化を包括的に統合する新たな文化的アイデンティティの創出に、美術教育がどのように関与してきたかを明らかにする。

これらの研究目的に対し、第Ⅰ章では今日の美術教育における文化的アイデンティティの形成と創造性育成の位置づけ、第Ⅱ章ではシンガポールの社会と文化、教育と文化的アイデンティティとの関連、第Ⅲ章ではシンガポールの美術教育のカリキュラム上の特徴を確かめ、その変遷過程におけるアイデンティティ形成と創造性育成について、第Ⅳ章ではシンガポールの近現代美術の展開をたどり、美術表現におけるアイデンティティの問題を、第Ⅴ章では1980年代から1990年代前半に民族文化がカリキュラム化され、教科書題材となり、自国の美術が国民文化としてオーソライズされていく過程を、続く第Ⅵ章では1990年代後半からの知識基盤社会を目指す教育改革の中で美術教育が大きく転換し、国民的なアイデンティティの形成に創造性育成が関与していく状況が論じられている。そして第Ⅶ章では、今世紀の芸術文化振興政策を、芸術文化を通じた国づくり、すなわちネイション・ビルディングととらえ、その資質となる創造性を社会的創造性という観点から考察し、美術教育における創造性育成が、新しい国民的なアイデンティティ形成を導く過程を論じている。

これらから、第Ⅷ章では、三つの研究目的に対する結論が次のように導かれた。

① 自治州時代に民族共通のカリキュラムが示されて以来、民族的なアイデンティティ形成と、他民族の文化理解のために、民族文化が教育内容に取り入れられてきた。その手法は、既存の美術文化を直接的に採用したり、民族の事物や象徴をモチーフやテーマとして採用したりするものであった。1980年代から1990年代には、初めて刊行された教科書を通して民族文化の題材が視覚的に示され、地元作家たちの作品が「自国の美術」としてオーソライズされていった。1990年代後半からの教育では、新しい国民教育、芸術文化振興政策、現代美術の台頭、さらに知識基盤経済への対応を背景とした教育改革によって、美術教育は視覚リテラシー育成を重視する方向へ変化した。民族文化の役割は縮小したが、かわりに現代的な芸術文化をもとにした国民的な文化とアイデンティティの創出を試みる新たな方法がとられている。

② 人間形成論に基づく創造性の解釈は今日まで続いているが、これと並行して、それぞれの時代の産業構造や社会的課題を反映して創造性が解釈されていた。輸入代替型産業から輸出志向型を経て、現代では知識基盤経済に対応した21世紀コンピテンシーとしての創造性が求められており、芸術文化産業立国を担う資質として育成が期待されている。

③ 今日、民族文化は社会の安定を維持するための「文化的な錘」として位置付けられている。この錘の上に、過去の文化的な実績と、新しい文化創造をめざした活動が展開している。シンガポールの美術教育は、芸術文化振興政策とともに、芸術文化を通じた国民的なアイデンティティの創出と新世紀の国づくりに深く関与し、その資質として「社会的創造性」の育成が目指されている。

これらの考察を通して、自治州時代から今日に至るシンガポールの美術教育における特徴的な機能とカリキュラムの史的展開が明らかにされた。

2. 審査経過

(1) 独創性

本研究は今まで総括的に検証されることがなかったシンガポール美術教育の変遷をカリキュラムを中心に辿り、さらにそこから国が各時代で期待した小中学校の美術教育で育成される力である「創造性」と、その先にある国民のアイデンティティのあり様と照合することで、シンガポールの美術教育の機能を明らかにしていった点に、独創性が認められる。

(2) 発展性

本研究はシンガポール美術教育史の網羅的な研究となっていることから、シンガポール一国に留まらず、広く東南アジアの美術教育、又グローバルな視点での美術教育における「創造性」の位置付けについての比較研究等を行う際の基礎研究となる可能性を有している。

(3) 学校教育の実践への貢献

シンガポールの美術教育の変遷は、グローバル化の潮流の中、日本の美術教育が今後乗り越えなくては行けないと考えられる多様性への対応、その中での国民のアイデンティティの形成と云う課題とその解決へのヒントを有している。このことから我が国の学校教育実践への将来的な貢献度が高い。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 佐々木 宰 氏の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。